様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０５６９

研究課題名（和文）後期近代英語期の辞書に見る意味と形態の変遷：新語義の足跡と作家の創意を照査して

研究課題名（英文）Morphological and Semantic Changes Seen in Late Modern English Dictionaries: In Comparison with a Writer's Invention Strategies

研究代表者
脇本　恭子（Wakimoto, Kyoko）

岡山大学・教育学研究科・教授

研究者番号：００２５８２９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，英国における小説黎明期の作家が用いた「新語」の形態，及び，その時代に特徴的な語彙について，17世紀末から19世紀初頭の後期近代英語期に出版された代表的な「英語辞書」に照らし合わせて調査・分析したものである。
　Dr. Johnson の『英語辞典』（1755）を基準として，それ以前に出された辞書とそれ以降に出された辞書に分けて，広範囲にわたり調査を行った。照査した18世紀の作家は，Samuel Richardson が中心であるが，必要に応じては Defoe, Swift のような同時代の作家と比べたり，前時代の Shakespeare からの影響も吟味・考察していった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　18世紀の英語を調査した先行研究は全般に十分とは言えず，辞書研究においても Dr. Johnsonの『英語辞典』の調査が主流を成し，史的辞書研究においては今後に託される研究余地が十二分にあった。この状況に鑑み，本研究では当時の作家の使用し始めた語彙の特性を特に複合語より調査し，Dr. Johnson の前後の辞書でどのように収録数や記載の仕方が異なるか調査した。
　英語は柔軟性に富む言語で，Dr. Johnson 以降大幅に収録語彙数が増えた一因が，当時の作家の創造した新語によるところがある一方，作家の自由な発想に対し，語彙によっては辞書の記載に及ぶにはかなりの時間的ずれもあることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：I have made a close investigation on words peculiar to 18th century writers, particularly to Samuel Richardson, in reference to Late Modern English dictionaries. As is well known, Dr. Johnson's “A Dictionary of the English Language” (first published in 1755) is the most famous and influential dictionary in English history. I have conducted a survey of representative 18th century dictionaries, dividing them into two periods (the period before 1755 and the period after 1755), in hopes to find out differences between these two periods. Furthermore, I have tried to examine whether or not there may have been a significant influence by Richardson and/or his contemporary writers on Dr. Johnson’s adding new words to his dictionary.

研究分野：英語学：18世紀の英語の言語・文体研究

キーワード：英語辞書　後期近代英語　Samuel Richardson　Dr. Johnson　複合語　18世紀

１．研究開始当初の背景

英国において 18 世紀は英語発達史上，重要な時代でありながら，この時代の研究は，実質，比較的進んでいないのが現状であった。こうした現状に鑑み，これまでに 18 世紀を中心とする後期近代英語の調査に言語・文体面より取り組み，主要所属学会である「近代英語協会」や日本英文学会中国四国支部大会のシンポジウムで口頭発表を重ねてきたが，これらの発表を軸に，さらなる調査・研究を進めることとした。

そこで，今回の科学研究費補助金の交付を受ける期間に研究課題としたのが，小説勃興期の作家（なかでも Samuel Richardson）が使用し始めた語彙や慣用句が，同時代の辞書の中で，いつ頃からどの程度記載されるようになったのか，Dr. Johnson（1709-1784）の『英語辞典』（*A Dictionary of the English Language*，初版 1755）前後の後期近代英語期の主な辞書を調査することにより，辞書への新語の追加に作家の影響がどの程度現れているのか探ることを目指した。

２．研究の目的

本研究は，英国において近代小説黎明期の作家が使用し始めた「新語」「造語」の形態や語義変化を，17 世紀末から 19 世紀初頭までに出版された「辞書」に照らし合わせて調査・考察することにある。100 年余りにわたる期間，意味と形態の変遷を通時的に辿る中で，後期近代英語期の辞書の意義・役割と特徴を吟味・分析していくと共に，語彙の創造・選択における当時の代表的作家（特に Samuel Richardson）の「独自性」「創意」を浮き彫りにすることを研究目的とした。

３．研究の方法

まずは，Samuel Richardson を中心とする近代小説の祖と称される作家について *Oxford English Dictionary* の用例に新語義として初出となっている独自性の高い語を収集し，必要に応じては，それらの語を語形成の面より分類していった。また，Richardson や後代の作家に多大なる影響を与えた Shakespeare についても，意味と語形成の面を広範囲に比較することで，その特徴を浮き彫りにしていった。

他方，Dr. Johnson の『英語辞典』（1755）を基準として，それ以前に出された辞書（例えば，John Kersey 編纂の *A New English Dictionary*（初版 1702）や Nathan Bailey 編纂の *An Universal Etymological English Dictionary*（初版 1721），Abel Boyer の *The Royal Dictionary Abridged*（初版 1708）等）とそれ以降に出された辞書（例えば，Francis Allen の *A Complete English Dictionary*（初版 1765）や John Ash の *The New and Complete Dictionary of the English Language*（初版 1775）等）に分けて，ターゲットとする語（特に複合語）が Dr. Johnson の前後の辞書でどのような扱われ方をされているのか，前後でどのように記載の仕方に変化が見られるのかを調査した。

４．研究成果

今回調査したものは，17 世紀末から 19 世紀初頭に至る 12 種以上の辞書に加え，それぞれの辞書の様々な版も比較･考察の対象としたため，取りまとめをするのに多くの時間を費やし，さらに，Richardson だけでも *Pamela*（1740-41），*Clarissa*（1747-48），*Sir Charles Grandison*（1753-54）という三つの長編書簡体小説に，『模範書簡集』（*Familiar Letters*）を合わせると，膨大な言語資料となるため，ターゲットとする語の選出にも労を要した。そのため，論文としての発表に至ったのは実質 4 本に留まったが，2016 年の “The 57th Summer Seminar of the English Research Association of Hiroshima” では，3 時間余りにわたり 18 世紀の原書の精読であるテキスト・リーディングを一人で担当し，その中でも特殊な語彙について，複数の辞書の定義を比較すると共に，作家の独創性についても考察できたことが，一つの研究成果の現れとして挙げられる。

今回の調査は，主に 18 世紀の辞書に見る語彙の歴史的発達と同時代の作家による影響の照査ではあるが，英語学領域の研究だけに終わらず，広くは，高等学校・大学での英語教育にも応用していけるものではないかと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 脇本 恭子 (2019) 「Richardson の小説における “half” の使用法—18 世紀の英語辞書と照らし合わせて—」,『ペルシカ』, 査読有, 第 46 号, 岡山大学英文学会, pp. 13-29.

② 脇本 恭子 (2017)「18 世紀の辞書に見る *Self* Compound—Shakespeare の使用に比較して—」,『ペルシカ』, 査読有, 第 44 号, 岡山大学英文学会, pp. 27-48.

③ 脇本 恭子 (2015)「英語教科書の歴史に辿る教材としての英詩—有海（1938）再考—」,『岡山大学教育学研究科研究集録』, 査読無, 第 160 号, pp. 39-50.

④ 脇本 恭子 (2014)「語学的文体論に基づく大学英語教育—二篇の英詩を教材として—」,『ペルシカ』, 査読有, 第 41 号, 岡山大学英文学会, pp. 31-47.

〔学会発表〕（計 2 件）

① 脇本 恭子 (2017) 「英語学の知見を援用した文学作品の分析—英語教育への応用を目指して—」, 日本英文学会 中国四国支部 第 70 回大会（シンポジアム「題目：英語教育と文学」）.

② Kyoko Wakimoto (2016) Reading of a Literary Text: “A Reading of Oliver Goldsmith’s *She Stoops to Conquer*, Acts I and II,” The 57th Summer Seminar of the English Research Association of Hiroshima, ERA (The English Research Association of Hiroshima).

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://edu.okayama-u.ac.jp/~eigo/wakimoto/Welcome.html

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。